

- 4、行程 約十キロ、乗車賃 不明
- 5、所要時間 出羽坂―佐賀駅 約一時間
- 6、回数 一日二往復（午前・午後各一往復）
- 7、創設 明治三十年五月ごろ、廃止、明治二十七年十月ごろ

創設当時は黒塗りのスマートな箱馬車をたくましい「アオ」の馬が鉄蹄の音も高く、リズムに乗って馳せ行く様は美事なもので、道行く人は言うに及ばず田畑で働く姉さん達も立って眺めていたという。道路は県道ではあったが、広くなったり、狭くなったり、勾配がついたりして、今日の道路とは似ても似つかぬもので、それに降雨ときたら想像以上の困難が伴っていたようである。利用する客は絶えずあったようだが、明治三十七、八年の日露戦争が勃発するや、人馬等四囲の情勢はこの経営を続行することができずに、ついに止むを得ず廃止することになったようである。 以上

10 当時の物価

明治八年（一八七五）ごろ、佐賀では佐賀の乱の影響もあって米一升が七銭で、その後は通信運輸機関の発達の関係で一升五銭と安くなっている。しかし明治十三年には一升十銭を越すなどの変動がある。労働賃金も明治十七年には大工の日給が二十二銭、同二十五年には二十五銭、同三十年には五十銭、同三十六年には五十五銭、同四十一年には八十銭となり、人夫の日給も明治十七年の十銭から明治四十一年には六十五銭となっている。すべての物価が戦争をきっかけに高騰した傾向が見られる。

明治十六年実相院に残る弘法大師千五十年祭出納簿を見ると豆腐一切八厘、こんにやく五厘、酒一升

十三銭、十九銭、醤油一升六銭、酢一合一銭四厘、杉板一坪五十二銭、うどん粉一斤（六〇〇グラム）三銭二厘、更紗布一尺（三十七センチ）五銭となっている。明治十八年五月二日付佐賀新聞社紙では、白米一升八銭、酒一升十七銭、二十銭、玉子（卵）一個四厘、葱十把一銭になっている。

二 大正時代

概 説

大正時代は明治四十五年（一九二二）七月三十日明治天皇の崩御により同三十一日元号を「大正」と改め、大正十五年（一九二六）十二月二十五日大正天皇崩御までわずか十五年間足らずである。

この時代は外交上国際協調主義をとった時代で、一般に欧化主義が勢力をもち返し、個人主義、自由主義、民主主義思想、いわゆる大正デモクラシーが台頭してきた時代である。更にこの時代は経済恐慌、文明開化の浸透の時代でもあった。

大正三年（一九一四）七月、第一次世界大戦の幕が開かれてから大正八年までの景気上昇期、同九年の反動恐慌、同十年以降の慢性的不況期という局面を呈していた。

綿紡績業、製鉄、鉄鋼、染料、海運、造船と目覚しく発展して、日本は本格的な工業国へと脱皮して行った。この大戦景気の頂点は終戦前後に近い大正七、八年ごろまでで、船成金と言われた巨大な利得

者を生んだ反面、諸物価の異常な上昇、労働者、サラリーマン、中産階級以下の収入の低下による生活苦と貧富の差の拡大、国民生活の不釣り合いがこの時代の特色と言えよう。「今日もコロケ、明日もコロケ」という歌の流行は大正七年ごろであった。百円札で鼻をかむと言われた成金組と、副食物はおろか風呂銭にすらこと欠く中産階級以下との生活の貧富の差がこのように違っていた時代であった。

1 主な事件

(1) 米騒動

第一次大戦による好景気は同時に物価の値上がりをもたらした。大正七年には米の買い占め等により米価は一升十銭台が一挙に五十銭台にはね上がったため、民衆の不安が爆発して米屋、倉庫等を襲う米騒動が全国的に起こった。佐賀市内でも小売値が三等米で一升三十八銭までになったが、暴動の情勢が伝わると、商人達は一升につき五銭の値下げを行い、更に一―二銭の値下げをしたり、県は米屋へ米のあつせん、市は外米の安売り（一升十五銭）をし、各町村でも細民救済資金の交付など大衆の暴動化を防ぐための応急措置が講じられた。しかし県内の一部では暴動が発生したため軍隊が出動してこれを鎮圧するという一幕もあったが、この辺では事無きを得た。

(2) 銀行の休業

大正十一年四月第一次大戦後金融緊縮政策のあおりを食って地方銀行の経営はいずれも苦しくなつた。大正十五年四月、神埼実業銀行の休業、同年五月古賀銀行が休業、ついにいずれも破産又は他の銀

行に併合されることになった。預金者側は大混乱を来たし、このための悲惨な家庭も続出した。

2 大衆文化

○ ラジオ 大正十四年に始まるラジオ放送は昭和三十年代のテレビ放送以上の画期的出来事であった。ラジオ受信機を囲む一家団らん風景は農村でも次第にふえていった。しかし大正末から昭和にかけての受信機の性能や形は今日からみれば単純で、放送の音声はしばしば雑音に悩まされた。けれどもラジオは家庭にいながらにして多くの楽しみや知識を与えてくれる驚くべき新発明であった。

○ 蓄音機 始めはらっぱ型のスピーカーだったが次第に箱の中に納まるようになり、手廻わしの物であった。この時代から蓄音機もそろそろ大衆化に入ろうとするのであるが、ラジオ程ではなかった。

○ 映画 この時代は映画とは呼ばず活動写真とか活動とかいっていた。活動写真を外国から輸入したのは明治の末期であるが、映画会社が日本に初めて出来たのは大正元年（一九一二）である。

佐賀市では大正四年十一月一日水ヶ江町新道に大勝館（後に朝日館）という映画常設館が設置され、続いて大正十年以降宇宙館（白山町）、日ノ出館（伊勢屋町）、新栄座（松原町新馬場、後の昭和館）等が続いて開設された。当時の映画は白黒の無声映画で弁士という映画の説明者がおり、映写幕の前面に楽屋があつて簡単な管絃楽や和洋合奏をして映画の伴奏をしていた。活動写真を大衆化したのはこの弁士の名調子でもあつた。入場料は内容や映画の本数によって違つが安い所で五銭、高い所で三十銭であり、映画スター等の実演を伴つような時は五十銭くらいであった。